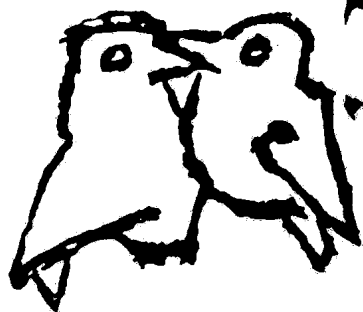


武者小路
實篤
全集



第二卷

武者小路實篤全集 第二卷

一九八八年二月一〇日 初版第一刷発行

著者——武者小路實篤

発行者——相賀徹夫

発行所——小学館

一〇一〇一 東京都千代田区一ツ橋 丁目二番一號

振替 東京八二〇〇番

電話 編集 〇三二五 一四二七〇

業務 〇三二五 五三三二

販売 〇三二五 五七二九

印刷・製本——大日本印刷株式会社

用紙——三菱製紙株式会社

定価=6800円

Printed in Japan ISBN4-09-656002-2
© Mushakōji Senemukai 1988

*著者換印は省略いたしました。 *造本には十分注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。 *本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製・コピーすることは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

武者小路實篤全集 第二卷

目

次

心と心

ある家庭

三

桃色の室

二一

或る日の夢

三二

二つの心

三九

或る日の一休

四六

「嬰兒殺戮」中の一小出来事

五一

養父

五六

●対話九篇

平凡な四人の男の会話

七四

おどりくらべ

七七

呑気な二人の女の会話

八〇

後ちに来る者

八五

私生児

八八

釘を打つ音

九〇

庭にゐる男

九二

人間造りの一瞬間の会話

九五

死後のイスカリオテのユダ

九六

向日葵……………一〇一

清盛と仏御前……………一〇三

わしも知らない……………一二八

二十八歳の耶蘇……………一三七

母親の心配……………一四四

或る日の事……………一六五

未能力者の仲間……………一八〇

罪なき罪……………一九四

Aと運命……………一二五

三和尚……………一二五

悪夢……………二六一

四人……………二九四

彼が三十の時……………三三五

その妹……………四三七

ある青年の夢……………四九七

童話劇三篇

六〇七

かちく山

六〇九

花咲爺

六二六

地藏と鬼

六三九

解説・解題

関口弥重吉

六五五

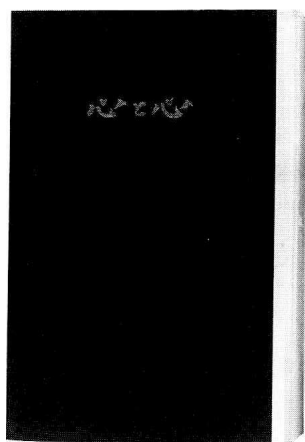
心
と
心

正親町公和兄

志賀直哉兄

木下利玄兄

この小冊子を十四日会及び回覧雑誌望野の
思ひ出に捧ぐ



『心と心』表紙

序

自分は自分のこの五年の間に書いたもので一度雑誌に出したものの、内から脚本七つ、対話篇九つを選んだ。

自分はそれ等をかいた時自分の全力を尽した。その時間は短かつたらう。その結果は小さかつたらう。しかしその当時の自分にはそれより仕方がなかつたのだ。さうして今の自分にとつてもある個処を少しなほすことが出来る外はどうすることも出来ないのである。

自分は之等の作品をかいたことを恥ぢない。さうして失望もしない。よし最初の二つの作品には見苦しい幼稚な個処があらうとも、自分はそれを自分の顔の上にある小供の時に出来た腫物の跡を恥ぢないやうに恥ぢない。自分はこの二つの作品を自分の全集の内からはのぞきたいと校正をしてゐる時に思つたけれども、しかし今こゝに之を公けにすることを恥ぢない。さうしてそれを無意味とは思はない。自分は出来るだけのことをした。批評家は出来ないことを要求することが出来ても、作家は出来るだけのことをするより仕方がないと云ふことを自分は知つてゐる。自分は今後も絶へず出来るだけのことをする。

それから先は作家としての自分にとつては第二義的のものである。自分は元より自分の与へるものゝ内に喜びを見出して下さる読者を想像する。しかしそれは自分のあづかり知る処ではない。自分は出来るだけのことをするより仕方がない。人になんと云はれても歩けない処は歩かない。充実に切つて歩ける唯一の道を通る。その道は充実に作の出来る時に自づと開ける唯一の道である。

十一月二十九日

ある家庭

登場人物

山田修蔵	年齢（第一幕に於て）
同 弘子	（沈着な意志の強さうな何処か優しい男）
同 太郎	（女らしい人）
同 次郎	（利口さうで優しい）
同 敏子	（上品な娘）
大林 晋	（次郎の親友、財産家の戸主）
茂木ふじ	（山田家の小間使、美しい娘）
其他女中一人	
	五十五歳
	五十歳
	二十八歳
	二十二歳
	十七歳
	二十三歳
	十八歳

第一幕

（修蔵の室、贅沢な西洋室）

修蔵。自分はお前を愛してゐる、しかし仕事も愛してゐる、金も愛してゐる、名譽も愛してゐる、権力も愛してゐる。御前を失ふことはつらいやうに、仕事や金や名譽や権力を失ふこともつらい。

お前が「おれ」を愛し「おれ」を占領してなほ小供を占領しやうとする様なものだ。太郎や次郎や敏子をお前は愛してゐるだらう。「おれ」一人を愛してゐるのではないだらう。

弘子。それでも段々貴夫の愛が薄らぐやうに思はれるのですもの。修蔵。さうかも知れない、「おれ」は段々仕事を愛するやうになつてきた。「おれ」のする仕事が益々大きくなつてきた、「おれ」の

今の一時間と云ふものの価値は前の一ヶ月の価値に相当してゐる、お前と結婚したては月に六十圓ぐらいきり取れなかつたが今は二万三圓づゝ入つてくる、夫だけ俺は忙がしくなつたのだ。

弘子。然し妾は少しも幸福になりません。

修蔵。幸福には成らないだらう、然しお前はお前のプライドを幾分か満足させてゐるだらう。

弘子。それはさうですわ。

修蔵。それであきらめるより仕方がない。この世にさう幸福がころがつてゐるものか。それにしても子供達はどうしてゐる。

弘子。音楽会に三人でゆきました。

修蔵。さうか、三人が仲がよくつて仕幸だね。

弘子。仕幸です、それに品行がいゝのが何より仕幸です。しかし三人とも段々妾からはなれてゆきます。

修蔵。さうだらう、もう齡が齡だからね。

弘子。貴夫には段々冷淡にされ、小供には遠ざかれては妾は浮ばれませんか。

修蔵。今度は孫だ。

弘子。ほんとにもう太郎も妻をもらはなければなりませんね。

修蔵。おれもそれを考へてゐるのだ。川中さんの娘はどうかと思つてゐるのだ。

弘子。川中さんの。駄目ですよ、太郎は常子さんの悪口を云つておましたよ。

修蔵。生意気な、親のすねを噛ちつて選り好みするなんて。

弘子。それでも貴夫だつて若い時は。

修蔵。おれは太郎より働きがあつたからな。

弘子。太郎だつて働かなければならなかつたら何かするでしやうよ。

修蔵。出来るかね。

弘子。貴夫よりは利口でしやうよ。

修蔵。どうか。しかし馬鹿じやないやうだね。

弘子。馬鹿な者ですか 妾なんかとてもかなひませんわ。

修蔵。お前は馬鹿だからさ。

弘子。それでも貴夫にはかいますわ。

修蔵。それは惚れてゐたからさ。

弘子。かしなにしろ常子さんはだめですよ。

修蔵。少し「おでこ」だね。

弘子。よつぽどですわ。

修蔵。お前、心あたりがあるのかい。

弘子。御座います。

修蔵。誰だい。

弘子。石山さんの滝子さんです。

修蔵。うん、あれなら太郎も不服は云ふまい。

弘子。貴夫は不服ですか。

修蔵。不服じやないが川中の方が都合がいゝのだ。

弘子。まあ！

修蔵。いゝよ／＼それなら石山さんの滝子さんにしやう。

弘子。それなら早速帰つたら云つて見ましやう。
修蔵。あゝ、太郎も喜ぶだらう。

(戸をたたく者がある)

弘子。お入り。

(藤入つてくる)

藤。自働車の御用意が出来まして御座います。

修蔵。さうか。(藤退場)

弘子。何時頃お帰りになります。

修蔵。一時頃になるだらう。

弘子。ほんとに毎晩お遅いのね。

修蔵。そのお蔭でおれもお前に頭が上らないのだ、しかしこれも

家の為だからね。

弘子。さうおつしやればさうですね。(二人退場)

(暫くして弘子帰つてくる、姿見の前に立つて見る。足音がする、戸を

たたく)

弘子。お入り。

(太郎、次郎、敏子入つてくる)

三人。唯今。(おじぎをする)

弘子。面白かつたかい。

敏子。え。(三人出やうとする)

弘子。太郎一寸話したいことがあるのだ。

太郎。さうですか、僕も一寸話したい事があるのです。

(敏子、次郎、退場)

弘子。お前の話したい事は。

太郎。お母さんの話したい事は。

弘子。お前からお云ひ。

太郎。お母さんから。
弘子。お前の云ひたいことゝ、妾の云ひたいことゝ同じかも知れ

ないよ。

太郎。同じでしやうか、同じだと大変嬉しいのですが。

弘子。同じだらうよ。

太郎。違うでしやう。

弘子。何んだい。

太郎。お母さんの。

弘子。それなら頭字だけ云ふよ、「け」の字の附く事だよ。お前も

年頃だから分るだらう。

太郎。僕の方は「が」が附きます、違うでしよ。

弘子。何んだらうね。

太郎。お母さんのは結婚のことでしやう。

弘子。さうだ、よくあたつたね、同じかい。

太郎。ちがいますく。

弘子。然し何しろ年頃になつたのだから結婚の話に乗つてくれる

だらうね。

太郎。乗らないこともありませんが、その前に外国へやつてもら

いたいのです。

弘子。外国？

太郎。え、三年許りでいゝのです。

弘子。三年？

太郎。たつた三年でいゝのです。

弘子。三年がたつたですか、お前が三十一歳になつてしまふよ、

滝子さんが二十四歳になつてしまふよ。

太郎。滝子さん？ 滝子さんを僕の妻にしやうと思つておゐてな

のですか、滝子さんが廿四歳にならうが、三十にならうが五十にならうが構はないじやありませんか。

弘子。滝子さんが五十になる時分には妾はこの世にゐませんよ。

太郎。お母さんは人の云ふことを邪推するのですね、滝子さんは他人ですから幾つにならうが、死なうが構わないと云ふのです、お母さんのことは云つてはしません。

弘子。お前は滝子さんを妻にする気はないのかい。

太郎。ありません。

弘子。なぜだい。

太郎。なぜと云ふことはありませんが滝子さんは虫がすかないのです。

弘子。そんなら、常子さんがいいのかい。

太郎。常子さんとは。

弘子。川中さんのさ。

太郎。あれは女じやないじやありませんか。

弘子。お父さんはあの人をお前の妻にしたく思つておゐでたつたのだよ。

太郎。馬鹿な。

弘子。お父さんを馬鹿と云ふのですか。

太郎。若しお父さんがさう仰しやつたなら馬鹿です、然しそんなことは何うでも宜しい外国へやつてくれませんか。

弘子。外国へやらないことはないが、なにしに行くのです。

太郎。今音楽会へ行てなほ西洋へ行き度なつたのです、クペリツクや、パデレウスキーが聞きたいのです。

弘子。そんなものを聞いて何になるのです。

太郎。お父さんが宴会へ行くやうなものです。

弘子。お父さんのは仕事の為ですよ。

太郎。金もうけの為ですね、然しそれだけでしやうか。

弘子。さうだとも。

太郎。さうでしよ、それならお母さんが芝居見に行くやうなものです。

弘子。それなら外国へやるわけにはゆきません。

太郎。なぜです。

弘子。妾は暇な人間ですよ、お前は之から働かなければならない人間ですもの。

太郎。お父さんは僕達があそべる為に金をもうけるのでしよ。

弘子。そんなことはありません。

太郎。それなら誰の為に金をもうけてゐるのです。

弘子。それは妾は知らないよ。

太郎。さうですか、今の世に金をもうけるのは子供の自由の為です。子供の幸福の為です。子供の愉快にくらしてゆく為です、さうはお思ひになりませんか。

弘子。知らないよ。

太郎。お父さんも知らないでしやうが、さうでなければ、金持になる必要はありません。財産の世襲などは無駄なことです。僕はお父さんの所にある金を生かしてやりたいのです、一人の人も幸福に出来ない、さうして幸福を束縛するやうな金はない方がいゝと思ひます。

弘子。理屈は分らないがね、何しろお父さんに相談をして返辞をするよ、しかし外国にゆく前に結婚の話をきめておいてもらいたいね。

太郎。結婚は歸つてからにしましよ、私には満三十にならないと

結婚が出来ないのです。

弘子。なぜ？

太郎。法律が禁じてゐます。

弘子。おかしいことを云ふね、二十三歳で結婚してゐる人がいくらでもあるじゃないか。

太郎。あれは親同士が子供を結び付けてゐるのです、満三十にならなければ結婚は出来ないのです。

弘子。お前の云ふことは少しも解らない。

太郎。解らない方が結構なのです、なにしろ結婚は外国へ行つてからにします。

弘子。西洋人を細君にしては困るよ。

太郎。まあしないでしやう、お母さんが困るよりも西洋人がこんな家に島流にされたら困るでしやうからね。

弘子。お前の云ふことは少しもわからない。

太郎。私の云ふことがわからないのではなくつて、法律や人情がわからないのでしやう。

弘子。お前はどうかしてゐるね。

太郎。いゝえ何うもしません、何しろ外国にやらして下さい、見聞を広めて力を養つて来ますから。

弘子。きつと三年だね。

太郎。満三十になつたら帰つて来ます。

弘子。まあお父さんに相談して見やう。

(戸をたたく)

弘子。お入り。

(藤入ってくる、名刺を渡して)

藤。この方がお出でになりました一寸御目に掛りたいとおつしや

いました。

弘子。さうか。(と出てゆく)

(藤は太郎の方を見て微笑む)

太郎。藤！

藤。はい。

太郎。近い内外国に行くかも知れないよ。

藤。まあ！

太郎。驚かなくつていゝよ、三年たつたらきつと帰つてくる、その時はおれは強くなつて帰つてくるからね。

藤。三年も行つてゐらしやるの。

太郎。三年行かなければならないのだ。今お前の側にゐると屹度お前は死ななければならぬ。

藤。なぜ。

(太郎は藤に接吻して)

太郎。たまらないもの。

(幕)

第二幕

二年後の春、午前

(次郎の室、西洋間、テーブルに向つて次郎は何か書いてゐる、書きおえてから歩きながら朗読する)

次郎。お兄さん毎度お手紙有難う、私も西洋に行きたくなりました、然しお兄さんが御帰りにならなくつては西洋には遣て貰へさうもないので閉口してゐます。自分はこの頃何にも手につきません。自分の考は方々馳けづりまわつてゐます、今日はかくこと

はありません、皆相変らずです。(声を少しふるへる)

例によつてお藤さんのお手紙を御送りします、くわしいことはこの内に書いてあるでしやうが、お藤さんはお兄さんの手紙ばかり待つておゐでゝす、お兄さんの手紙をわたす時、お藤さんの顔は輝きます。

(手紙を折つてもう一つ封じてある手紙と一緒に封筒の中に入れて封をする)

(誰か戸をたたく)

次郎。誰れ？

外。藤で御座います。御手紙が。

次郎。お入り。(藤出てくる、手紙を次郎に渡す)

次郎。お兄さんからかい。

藤。はい。

(次郎封をあけて中から一つの封書を出して藤に渡す、藤は嬉しさうにお辞儀をして)

藤。さつきの手紙お出し下さつて？

次郎。こゝにあるよ。(と手紙を渡す)

藤。この中にかき加へていゝでしやうか。

次郎。又今晚お兄さんの処へ手紙をかくからその返辞はその時でいゝだらう。

藤。実はお便りがないので心配してをりますと書いておきましたのですから、それをかき直したいので御座います。

次郎。便りが無いつて何日からないのか知てゐるかい。

藤。一週間程御在いませんでしたもの。

次郎。さうだね、しかし書き直さない方が真心が見えていゝだらう。明日の朝どうせ又出すから。

藤。それなら又御願ひいたしますよ。

次郎。今晩中に書いて置くといゝ。

藤。はい。(退場)

(次郎は後ろ姿に見惚れてゐる、姿が消えると嘆息を漏し兄の手紙を見る)

(又戸を叩く音がする)

次郎。誰れ。

弘子。母です。

次郎。お入り下さい。

(弘子入つてくる、さうして次郎の傍に腰をかける)

次郎。お兄さんから音信がありました。

弘子。さうかい、なんて？

次郎。達者にしてゐますつて。展覧会を見たことが一寸かいてあります。さうして皆さんはお変りはないか宜しく云つてくれと書いてあります。

弘子。ほんとによく手紙を寄來してくれるので嬉しい、あつちへ行くと矢張り自家の事が氣になるのだね。

次郎。さうと見えますね。

弘子。お前に一寸云ひたいことがあるのだがね。

次郎。はい。

弘子。昨日お父さんと話したのだがね。

次郎。はい。

弘子。この頃藤がお前の所へよく出入して暫くお前と話してゐると云ふので女中仲間では変な風評があるさうだから氣を附けないといけないう。

次郎。え、そんな風評がありますか。

弘子。お前に限つてそんなことはないと思ふがね、妾も注意してゐるとほんとにさう云はれても仕方がないと思ふのだよ、こんなことを云ふのはいやだがね、若しものがあつたならそれこそ大変だからね。

次郎。そのことなら大丈夫です。

弘子。大丈夫だらうね。

次郎。大丈夫です。

弘子。しかし若いもの同士のことだからどんなことがあるかも知れないからね、妾は藤に暇をやらうかと思ふのだ。

次郎。暇？

弘子。あゝ。

次郎。そんなことをしたら藤は芸者にされはしませんか。

弘子。されるだらうよ。

次郎。そんなら暇をやることは私は不賛成です。

弘子。今そんなことを云ふと御前疑はれるよ。

次郎。疑はれてもかまいません。

弘子。まあ！ そんならほんとなのだね、そんならどうしても暇をやりますからその心算でおゐで。

(怒つて出やうとする)

次郎。お母さん！ 一寸待つて下さい。

弘子。知らないよ。(と出やうとする手をとつて、無理にとめる)

次郎。お母さん、暇をやるのは宜しい、僕は決して藤とは逢はふとはしません、しかし藤が芸者にされないですむやうにして下さい、切角お母さんやお父さんの同情で藤は芸者にならずにすんだのではありませんか、藤はそのことを非常に恩に着てゐます、金でなることですからどうかして下さい。

弘子。なぜ泣くのだい、矢張り、矢張り風評は本当なのだね。

次郎。ほん当かも知れませんが、うそかも知れませんが、そんなことはどうでも宜しい。私は藤を芸者にすることはいいやなのです、藤は人妻になるまで無垢にさしておきたいのです。

弘子。それは出来ない事ではない、その代り藤に逢つたり、文通したりすることはなりませんよ。

次郎。藤が芸者にならなければ逢ふことは勿論、文通もいたしません。

弘子。きつとしないね。

次郎。お母さんは僕を疑ふのですか。お疑ひになると僕はやけを起しますよ。

弘子。疑はないよ、それなら今日暇をやりますからね。

次郎。よろしい、しかし別れる時に一遍逢はして下さい。

弘子。逢はすのはいい、が妾の居る処でだよ。

次郎。それでは困ります。

弘子。それでは困るならば逢はさないだけのことだ。

次郎。よろしいそれなら文通します。

弘子。お前！

次郎。お母さん！

弘子。不孝もの。

次郎。不孝ものにならなければ不孝ものです、お母さんのやうなわからずやの云ふことを聞いた日にはわからずやになつてしまいます。

(次郎は出やうとする)

弘子。何処へ行くのだい。

次郎。藤の処へゆきます。